

和泉式部と「あやめ草」

金子紀子

一 はじめに

和泉式部の歌については、すでに先学の詳細な研究があり、多方面からのアプローチがなされ、論じられている。しかし、千五百余首の詠歌のうちには、伝統的かつ凡庸な詠作とみなされてまだ研究の対象となっていない歌も数多く存在し、和泉式部の歌の本質の解明には、これらの一見非個人的な歌についても考究する必要がある。

そこで、本稿では、「菖蒲」「あやめ草」の歌を取り上げ、分析を試みたい。「あやめ草」の歌とは、詞書、または歌の中に「菖蒲」「あやめ草」「あやめ」の語が入っている歌をいう。和泉式部は「あやめ草」の歌を『和泉式部集』^(注1)で二七首、『詞花和歌集』に一首、『和泉式部日記』に一首詠んでいる。このうち、勅撰集にのみある『詞花和歌集』の一首のほか勅撰集に他出しているのは、『後拾遺和歌集』に一首、『続古今和歌集』に一首のみである。いわば、当時においても和泉式部の歌としてあまり注目されていなかった歌が多い。

和泉式部以前に「あやめ草」を複数詠んでいる歌人はさほど多くない。『貫之集』(正保版歌仙歌集本)^(注2)は全八八九首のうち八首、『能宣集』(西本願寺本)^(注3)は全四八五首のうち一七首、同時代の『赤染衛門集』(榊原本)^(注4)でも全六一四首のうち、贈答歌の赤染衛門自身の歌一首が確認できるくらいである。これらは、平安中期までの「あやめ草」を詠んでいる歌人の中でも歌数が多い方である。和泉式部の場合、『和泉式部集』一五四九首(重複、重出歌を含む)のうちに二七首あり、母数が違うので一概に比較はできないが、やはり「あやめ草」の詠歌数は他の歌人より

多いといえよう。その意味では平凡な歌材、詠歌として等閑視されてきた「あやめ草」をめぐる歌は、案外和泉式部の詠作の特質とも関わっているのではないかと推察される。

「菖蒲」（あやめ草）は、五月五日の節供に欠かせない植物である。『枕草子』には「節は五月五日にしく月はなし。菖蒲、蓬などのかをりあひたる、いみじうをかし」（第三七段）をはじめ、他にも数カ所菖蒲を賞美する記述が見られる。「枕草子」第六四段で「草は菖蒲」といい切っているこの清少納言（しかし、『清少納言集』には「あやめ草」詠はない）と和泉式部が、「あやめ草」を媒介に歌を交わしていることも興味深い。

「あやめ草」は言うまでもなく五月五日の「折」のものである。和泉式部の「あやめ草」の歌がどのような場で詠まれたかを確認すると、概ね、五月五日を意識している歌、夏の歌、題詠の三つに分類される。このうち「五月五日」に関わる歌が、『和泉式部集』、『詞花和歌集』、『和泉式部日記』の歌を含めると全一九首のうち二三首を占める。このように和泉式部に「あやめ草」詠が多いのは、「折」をとらえて歌を詠むのに、興味を引かれる歌材であったことが大きいのではないだろうか。

このような見通しのもと、和泉式部の「あやめ草」の歌について、他の歌人との比較も加えて考察したい。

二 歌材としての「あやめ草」

植物としての「菖蒲」とは、サトイモ科の多年草で、いわゆる花の咲くアヤメ科の「アヤメ」、「ハナショウブ」ではない。「和歌植物表現辞典」^(註)によれば、「北半島の温帯から熱帯の水辺に群生する多年草。根は横に這い、枝分かれが多い。植物全体、特に地下茎に芳香がある。」とある。菖蒲は、その芳香が邪気を払い長寿の源と考えられていたという。その起源は中国に求められるが、その後日本に伝わり、五月五日の端午の節供のシンボルとなる。葉は軒に

葺いて邪気を払い、根は引いて人に贈り、根の長さを競べたり、根を袂にかけて長寿息災を願う素材となった。また薬玉の材料にもなった。

これらをふまえて、和歌の歌材として「あやめ草」がどう使われているかを考察する。

なお、「菖蒲」は漢語で詞書には使われるが、和歌の表現としては「あやめ草」である。

『万葉集』には「あやめ草」は、十二首詠まれており、このうち卷一山前王の歌(四二三)と、卷十古詠(二九五五)とその重出歌(四〇三五)を除いた九首、すなわち卷八(二四九〇)、卷十八(四〇八九、四一〇一、四一〇二、四一一六)、卷十九(四一六六、四一七五、四一七七、四一八〇)は、大伴家持の詠である。そして四一〇二歌を除くすべてにおいて「ほととぎす」が「あやめ草」の語の数句前か、直前に詠まれている。また、霍公鳥を詠む(鳥を詠む)意の詞書をもつものが六首ある。すなわち、詠歌の中心は「霍公鳥」であって、「あやめ草」ではない。例えば次のような歌である。

大伴家持が霍公鳥の歌一首

ほととぎす 待てど来鳴かず あやめ草 玉に貫く日を いまだ遠みか

卷第八 (二四九〇)

霍公鳥を感じる情に飽かずして、懐を述べて作る歌一首へ并せて短歌

春過ぎて 夏来向かへば あしひきの 山呼びとよめ さ夜中に 鳴くほととぎす

初声を 聞けばなつかし あやめ草 花橘を 貫き交へ かづらくまでに 里とよめ

鳴き渡れども なほし俣はゆ

卷第十九 (四一八〇)

他の「あやめ草」は「花橘を玉に貫き一に『貫き交へ』縷にせむと」(四二三)、「花橘に 貫き交へ 鬢にせよと」(四二〇二)、「花橘を娘子らが 玉貫くまでに」(四一六六)などと表現され、これを見ると「あやめ草」は「花橘」

とともに、「玉」に貫き、「縵」にするものであることがわかる。これは、節会の行事に使われる、「菖蒲蔓」「薬玉」に相当するものであろう。

また表現として特徴的なのは、「縵にせむと」、「いまだ遠みか」、「玉貫くまでに」からうかがえるように、五月五日以前を詠んでいることである。五月の行事は意識されているが、それは主題ではなく、むしろ五月の鳥である「ほととぎす」と取り合わせるためのある一日にすぎないのであって、前後の表現を見ると、「ほととぎす」に導かれて、「あやめ草」が詠まれており、「あやめ草」はほととぎす鳴く五月の景物のひとつとしてとらえられている。『万葉集』の「あやめ草」は「ほととぎす」と結びつけて詠まれているのである。また、掛詞の使用は見られない。

『古今和歌集』になると、「あやめ草」の歌は次の一首のみである。

『古今和歌集』卷第十一恋歌一

題不知

読人しらず

ほととぎす鳴くやさ月のあやめ草あやめも知らぬ恋もする哉(四六九)

この歌の上句は、万葉集の表現に見られる「ほととぎす鳴く五月にはあやめ草……」(四二三)、「ほととぎす来鳴く五月のあやめ草……」(四一〇一)の表現をふまえているが、この歌の上句は下句の「あやめも知らぬ」を導きだすものであり、万葉集歌とは違い「ほととぎす」は主役ではない。また、「あやめ草」は「文目(条理)」と掛詞が使用されており、その意味では「恋歌」に分類される特徴をもっている。こうした「あやめ草」の表現の変化はこれ以降より明確になる。

一方「ほととぎす」と「あやめ草」を同時に詠んだ歌は、平安時代では古今集のあとの勅撰集においては『拾遺和歌集』卷第二夏(一一一 醍醐天皇)に一首のみ(屏風歌)である。私家集においては、平安中期の歌人詠にも散見

されるが、全体として「ほととぎす」と「あやめ草」を取り合わせる発想はすたれていく。

勅撰集では「あやめ草」を含む歌は、前掲の『古今和歌集』は一首のみ、『後撰和歌集』にはなく、『拾遺和歌集』九首である。『後拾遺和歌集』十一首、後に『金葉和歌集』においてはじめて夏部に八首、まとまった歌群をなす。『拾遺和歌集』に見られる「あやめ草」の用例は、卷二夏に四首（一〇八、一〇九、一一〇、一一一）登場し、卷九雜下に一首（五七二）、卷十二恋二に二首（七六七、七六八）、卷二十哀傷に二首（二二八〇、二二八一）である。このうち五月五日を意識した歌は五首、概ね五日前後の三首、その他一首である。夏部の「あやめ草」歌四首は歌合一首（二〇八）、屏風歌二首（一〇九、一一一）、夏歌一首で（一一〇）であるが、次は五月五日の歌である。

屏風に

大中臣能宣

昨日までよそに思し菖蒲草今日我が宿のつまと見る哉（『拾遺和歌集』一〇九）

題知らず

よみ人知らず（賀茂保憲女）

今日見れば玉の台もなかりけり菖蒲の草の庵のみして（『拾遺和歌集』一一〇）

これらは五月五日に宮中から民家まで菖蒲を葺きわたした情景（一一〇）と、軒に葺いた菖蒲草を、今日五月五日に見れば我が家の軒の端、妻とみる（一一〇九）という、節供の折の歌であり、主体は「あやめ草」である。

次の恋部二首は「あやめ草」は自身を表現している。

五月五日、ある女のもとに遣はしける よみ人知らず

いつかとも思はぬ沢の菖蒲草たゞつくぐと音こそ泣かるれ（『拾遺和歌集』七六七）

題知らず

躬恒

生ふれども駒もすさめぬ菖蒲草かりにも人のこぬがわびしき（『拾遺和歌集』七六八）

『拾遺和歌集』の「あやめ草」の歌は、菖蒲が葺かれた軒の「端」を「妻」、「あやめ草」の「根」が「音」（郭公の鳴く音、泣く音）、「根こそ流るれ」と「音こそ泣かるれ」、「刈り」と「仮」などと、「あやめ草」に関わる掛詞が多数認められる。

『拾遺和歌集』においては、「あやめ草」という歌材が持つ主な特質がほぼ出そろっている。ただ、「あやめ草」を「引く」詠は見られない。

次に「あやめ草」の用例の多い『貫之集』、『能宣集』、『赤染衛門集』において「あやめ草」の用例を考察する。

『貫之集』の「あやめ草」の歌は、延喜年間の屏風歌に四首、天慶の屏風歌に四首、計八首みられる。屏風歌であるから、詠歌時期は五月とは限らない。延喜年間の屏風歌と、天慶年間のそれとは約二十年の開きがあり、天慶八年（九四五）の屏風歌は、最晩年の作となる。このうち注目されるのは延喜十九年（九一九）の屏風歌である。

五月五日

あやめ草根長き命つげばこそ今日としなれば人の引くらめ（『貫之集』一三二）

この「あやめ草根長き」という表現は、延喜年間の屏風歌に二首、天慶年間の屏風に三首確認でき、いずれも「あやめ草」はその根の長さが尊ばれ、長寿の祝いの歌の表現として多用されていることがわかる。

延喜御時、内裏御屏風の歌 廿六首 （のうち）

菖蒲とれる所、又、かざせるもあり

あやめ草根長きとれば沢水の深き心は知りぬべらなり（二二七）

郭公声き、しよりあやめ草かざす五月と知りにしものを（二二八）

この歌は詞書をみると、画を見ての詠とわかる。一二八では「あやめ草」は「ほどとぎす」「かざし」とともに詠

込まれ、「あやめ草」によって「五月」が意識されると詠むものである。

『貫之集』においては、屏風歌の中で「あやめ草」は「根長き」ことが大事で、「長寿」の象徴として、また五月そのものを表わすものと扱われている。一方で天慶年間の屏風歌では、特に類型化された儀礼的な歌になってしまっている。

『能宣集』では、「あやめ草」は十七首あるが、まずほぼ五月五日の歌である。そして、縁語、掛詞の表現が多く見られる。また、「根を引く」「根を贈る」という行為も詠まれている。

まず、屏風歌では次の歌がある。

五月五日、庭の卯つぎのうへに聞く

今日ひける菖蒲の草に時鳥ねを比べにや我がやどに鳴く（『能宣集』一一二）

五月五日、女ども端にゐて、ほととぎすを聞く

時鳥軒のま近くなくなるはあやめの草にねにやむつる（『能宣集』八六）

これらは、伝統的な時鳥とあやめ草の取り合わせであるが、「今日ひける菖蒲」の「根」と「時鳥」の鳴く「音」の長さをくらべるつもりかという表現（一一二）や、女達が端にいて、軒に葺かれた「あやめ草」に時鳥がたわむれている、その時鳥をきく（八六）という表現は、貫之の屏風歌では見られない発想の歌である。

また、「あやめ草の根」を贈る次歌があり、「ねのみかかる袖かな」は和泉式部の歌（第三節に後述）にも詠まれている。

おもふことはべるを、問ひ侍らぬ女に、同じ日菖蒲のねにつけて

あはれども問はぬにしげるあやめ草つゆけきねのみかかる袖かな（『能宣集』一四）

また、『拾遺和歌集』には見られなかった「あやめ草を引く」は次の歌に見られるが、「時くれどひく人もなき」、

「時鳥もの忘れする」などを見れば「五月五日に菖蒲を引く」ことは当たり前のこととして、五月五日歌の主題になつてゐることがわかる。

五月五日。まらうどめきたる人まできて、前なる池に菖蒲のおひたるを見て、今日までかくてあるよ、などいひ侍れば

時くれどひく人もなきわがやどにあやなくおふる菖蒲草かな（『能宣集』一六五）

同じところ、時鳥鳴かぬころ

あやめ草引くも見てき時鳥もの忘れする年かどぞみる（『能宣集』三七三）

「根」が「寝」につながる表現は、次の例がある。

五月節きこしめすに、五日の夕べ、知りたる人の棧敷にとどまりてはべるに、うへの人々まできて、女にもいいひ侍りて、今宵ここにはべらん、などいひ侍りければ、女にかはりて

あやめぐさ今日ばかりなるやどなればなにかは人にねをもみすべき（『能宣集』三七）

次の「根合」の歌三首は「これは根合ねあわせの記録としてはもつとも古い記録である。」とする。

五月五日、あるところに、菖蒲マアの根比ぶる哥、とはべれば

水底にありといふなる白玉はあやめねぐべく長くつらぬけ（『能宣集』三六八）

同じことに、州浜に鶴を立てて、菖蒲をくはせて、書くれうに

ちよよさすみぎはのたづも年ごとに今日のあやめはかみにとぞ思ふ（同三六九）

また、菖蒲を舟に作りて、釣りする人のせたり

釣りののを糸より長きあやめ草ねながら引きていざくらべみむ（同三七〇）

能宣の「あやめ草」の歌はある程度多いが、ほぼ貴族の館の節の賑わいや、季節を賞美する貴族や女房たちの日常の歌である。恋歌めいたものや、服喪中と見られる歌もあるが、五月五日の賀のやりとりである。大中臣能宣は和泉式部よりも一時代前の歌人ということになるが、能宣の亡くなった年（九九一）のころ和泉式部もおよそ十代であり、その孫娘の伊勢大輔と和泉式部が親しかったことを考えると、和泉式部自身が大歌人である能宣の歌にふれる機会もあつたであろう。後の和泉式部の「あやめ草」歌にみる縁語、掛詞の類が既に能宣の歌に見られるのである。

同時代の『赤染衛門集』にみる「あやめ草」歌は、自身の歌は十一首で、贈答歌の返歌が八首ある。「あやめ草」自体の用例としては、「根」は泣く「音」にかけられ、ねをかける「袂」「袖」が詠まれる。とくに「袂の玉」という表現は和泉式部には見られない。

五月五日右大将より、さうぶあはせしたるあふぎに、くすだまをおきて「これがかちまけ、さだめさせ給へ」とありしに、とのは左大臣におはしまししかば

ひだりにや袂の玉もむすぶらん右はあやめもねこそあさけれ（『赤染衛門集』一三五）

とのの御前、ものがたりつくらせ給ひて、五月五日あやめ草手まさぐりにして「けちかうみるをむなへしを」とて

わが宿のつまとはみれどあやめ草ねもみぬ程にけふはきにけり（同一三六）

「これがかへしせよ」とおほせられしかば

あやめふく宿のつまともしられざりつねをば袂の玉とこそみれ（同一三七）

一三六歌道長の歌は、能宣の「昨日までよそに思ひしあやめぐさ今日わがやどのつまとみるかな（一三七）」を踏まえて言い換えた歌で、恋歌めいた表現をしている。返歌は、そのあやめ草は宿の端（妻）とは知りませんでした、

根は薬玉につけて袂にするものでしょうと、切り返している。このあたりの掛詞を使つての応酬は、和泉式部と同時代の表現である。

次の歌は 灯心を薬玉につけて贈ってきたのだろうか、同じ事ならあやめ草の長い根をひいてほしいものだ、灯心に根をかえてさえ短いのはなぜ、と返しているが、赤染衛門の他の歌と少し違い、うちとけた遊びの歌となっている。

五月五日、かたらふ人のもとより、くすだまおこすとて

いつとでもこひぬにはなしけふはいとどかくとばかりのあやめにもみよ（同三〇九）

返し、とうじみのねにしたるが、ことにながらねば

おなじくはながくひけかしあやめ草ねをかへてさへみじかきやなぞ（同三一〇）

などがある。『赤染衛門集』は年代順にならないが、青春期の歌に「あやめ草」はなく、したがって恋愛の手段には用いていない。また、「ほどとぎす」など外界の景物を詠込む歌もない。最後の屏風歌に、「五月雨」「軒の雫」が詠まれているが、これは定番の表現である。赤染衛門の「あやめ草」歌はほぼ女房生活、家庭生活の屋内でのやりとりである。そして五月五日は世の中の節供の日の「あやめ草」であることを意識した上での歌であり、「あやめ草」を自らの心情を託す歌材としては詠っていない。

三 和泉式部の「あやめ草」歌の考察―「折」と「恋」

和泉式部の「あやめ草」及び「あやめ」の語を含む歌は、家集中に二十九首あり、そのうち清少納言が詠んだ歌二首を除くと、和泉式部の歌は二十七首、『詞化和歌集』一首、『和泉式部日記』に一首ある。以下、『和泉式部集』の引用は岩波文庫本を用い、勅撰集については、引用はすべて「新日本古典文学大系」（岩波書店）による。

一覽すると次のようになる。(便宜上、通し番号をふった。引用ではこの通し番号を使用する。尚、4、5、6、9、10、11の清少納言と和泉式部の贈答歌は第五節で詳述するのでここにはあげていない。)

〔正集〕

- 1 真菰草おなじ汀に生ふれどもあやめを見てぞ人も引きける(三二)
- 2 駒の足にくらべてみれど今日はなほ菖蒲の草のねこそせちなれ(三一九)
- 3 菖蒲草よどのながらのねならねど 荒れたる宿はつまどこそ見れ(三三三五)
人のかへりごとに、五月五日
- 7 涙のみ ふるやの軒の忍ぶ草けふのあやめも知られやはする(五一九)
五月五日、粽を人のもとにやるとて
- 8 深沢田みぎはがくれの真菰草昨日あやめに引かされにけり(五二二)
- 12 引く人もなくてきのふは過ぐしてきて我が忘るるに生ふるあやめは(五四七)
おなじ人に
- 13 うきに生ひて人も手ふれぬ菖蒲草ただ徒にねのみなかれて(五八五)
- 14 あやめ草五月ならねどわが袖に人知れぬねはいつか絶えせん(六一五)
田舎なる人に、ほととぎすに結びて、いと長き菖蒲の根をくはせて
- 15 そこまでは聞こえしもせじ郭公袂にかかるねを見てをくれ(七〇〇)
同じ頃、菖蒲の香のすずろにすれば
- 16 郭公忍びの声も聞こえぬにまだきもこゆるあやめ草かな(七〇四)

五月五日、葉玉おこせたる人に

17 引き出でたる程を思へばあやめ草つくる袂のせばくもあるかな（七四〇）

また、あるやうにある人に奉るとて

18 心根のほどを見するぞあやめ草草のゆかりに引きかけねども（七四一）

また、人に

19 身のうきに引けるあやめのおぢきなく人の袖までねをやくべき（七四二）

忍びて来る人の、つとめて、「人のあらはれぬる事」といふに、同じ五日

20 引けばこそ軒のつまなるあやめ草だがよどのにかねをとどむらん（七四三）

同じ朝顔の花を、人のもとより

21 霧の間に見し朝顔の花をこそけふのあやめはいとど分かれぬ（七四四）

その夜、早う見たる人々来合ひて、あはれなる物語などするを、人のもとより、「いかにあやめのね

によそふらむ」といひたるに

22 あやめ草そのねならねど時鳥なきこそしつれもとの人として（七四五）

〔続集〕

五月五日に、ある人に

23 隠れ沼に生ふるあやめの残らぬに人の古根ぞ悲しかりける（二〇八五）

とこなつ ほととぎす あやめぐさ これを人のよませし

24 すさめねど心のかぎり生ひたるは人知らぬまのあやめなりけり（二二二六）

五月五日、雨のいみじう降る日、独り言に

25 今日のはなほあやめの草のねどころも水のみ増る心地こそすれ(一二四七)

六日、この精進する男のもとより、「昨日のあやめも知らで過々して」などいひたれば

26 うたた寝にやがて淀野も見ぬ人はまして何てふあやめやは知る(一二四八)

五月五日、人に

27 今日のはなほ軒のあやめもつくづくと思へばねのみかかる袖かな(一二六六)

「堅根病む」と人の許に云ひたる人に、五月五日いひやる

28 今日だにも引きやは捨てぬ隠れ沼に生ふる菖蒲のかたねなりとも(一二四七)

同じ日、忍びたる人に

29 今日とても引きにやは来る菖蒲草ひとしれぬねはかひなかりけり(一二四八)

(以上「和泉式部集 和泉式部続集」清水文雄校注 岩波文庫 一九八三)

〔詞花和歌集 三一一〕

忍びけるおとこの、いかゞ思ひけむ、五月五日のあしたに、明けてのち歸りて、今日あらはれぬる

なむうれしき、と言ひたりける返事によめる

30 あやめ草かりにも来らむものゆへにねやのつまどや人のみつらん

〔日記〕

またの日、「けふやものへは参り給ふ。さて、いつか歸り給ふべからん。いかに、まして、おぼつか
なからん」とあれば、

31 「をりすぎてもこそやめさみだれてこよひあやめのねをやかけまし」

とこそ思ひ給ふべかりぬべけれ」ときこえて、

〔新潮日本古典集成 和泉式部日記 和泉式部集〕 野村精一校注 新潮社 昭和五六

〈他出〉

通し番号19 正集 七四二番歌

『続古今和歌集』 卷第三 夏歌

人の許に薬玉つけて遣はしける

身のうきにひけるあやめのあぢきなく人の袖までねをやかくべき

〔校註国歌大系第五卷 十三代集〕 講談社 昭和五一 復刻版

通し番号27 続集 一三六六番歌

『後拾遺和歌集』 卷第十四 七九九

五月五日に人のもとにつかはしける 和泉式部

ひたすらに軒のあやめをつくぐと思へばねのみかゝる袖かな

『和泉式部集』には、多くの重出歌を含むことが明らかにされているが、ここにあげた「あやめ草」歌は重出歌をみない。また、そもそも他出も少ない。こうした状況は、和泉式部の「あやめ草」歌にさほど注目される作がないことを推察させる。

詞書をもとに詠歌の状況を分類すると、次のようになる。

五月五日と五日に関わる歌 二十五首

詞書に五月五日とあるもの十三首（かへし、同じ日なども含む）

7、8、9、10（清少納言）、11、17、20、23、25、27、28、29、30

詞書にはないが、概ね五日詠と推定できるもの十首

4、5（清少納言）、6、13、15、18、19、(21)^(後)、22、31

六日詠二首（五日を意識している歌）

12（きのふ）、26（六日）

その他

歌群または題詠の中の一首（詞書はない）とみられる歌二首

3 掛詞、縁語が多用されている。前後の歌がやはり詞書のない春、秋の歌であるので、本来は題詠だったのかもしれない。

14 詞書のない連作（正集六〇五〜六二二）のうちの一首で、季節的には順不同

四季 夏歌二首 1、2

四月 16

題詠 24（どこなつ ほととぎす あやめぐさ これをひとのよませし）

これらの「あやめ草」の歌には、「あやめ」に関わる縁語掛詞の類が、実に多様なかたちで詠み込まれていることが注目される。「あやめ草」の「根」を「音」（鳴く、泣く）や「寝」に掛ける掛詞は、『能宣集』にみるごとく、この時代には常套的表現であるが、和泉式部においては「心根」「人の古根」「堅根」といった、ほかに例を見ない語彙に展開しているのが注目される。「あやめ草」と「こころね」の組み合わせは、ほかに平安後期の『実国集』に一首

あるのみであるし、「人の古根」、「堅根」は和歌には見ない語彙である。また、「ね」の縁語として、「よどの」（菖蒲の産地「淀野」と「夜殿」が掛詞をなす）や、「寝屋」「寝所」、「荒れたる宿」、「古屋」などを詠み込み、恋のイメージ豊かな景をなしている。さらに汀に生える「あやめ草」の植生をもとに、「深沢田」（和泉式部の一例のみの語彙）、「隠れ沼」、「泥地」（「憂き」と掛詞をなす）、あるいは水に関わることから「雨」や「涙」、「流れ」（「泣かれ」と掛詞）、「水のみ増さる」などの悲泣をイメージさせる表現に展開させている。

詠歌の状況から見ると、五月五日の「折を過ぐさぬ」こと、折を意識し、折をめぐるのやりとりが中心をなす。「あやめを」引くと歌う歌が多いのは、五月五日の行事に関わる行為だからだろう。ただし和泉式部の場合、

1 真菰草おなじ汀に生ふれどもあやめを見てぞ人も引きける（三二一）

のように、「引く」をもてはやすという含意で歌う例が多い。また先の「ね」にまつわる掛詞縁語、汀や水に関わる表現の展開からも窺えることだが、和泉式部の「あやめ草」歌は全体として恋の孤愁を歌うものが多く、それは、四季の歌や題詠として作られたものも同様なのである。詞書から窺える詠歌状況や、掛詞縁語の様に留意しつつ、和泉式部の「あやめ草」の歌を、以下「折」と「恋」の二つの側面から考えたい。

五月五日の「折」の歌には、五月五日の節供に関わる歌と、節句に関わる「あやめ草」を素材として、自身の心情を詠んでいる歌とがある。ただし和泉式部の場合五日の節供の歌といっても、前掲歌人（貫之、能宣、赤染衛門）のように、節供の行事の場合や、邪気を払い長寿を願う歌を詠むわけではない。節供に関わる歌であっても、実は、和泉式部は自身の思いを訴える場（契機）、思いを託す表現（景物）として詠んでいるのである。

まず、節供に関わる歌を考察する。節供の物とともに詠まれた歌は、8 粽、9 及び15 菖蒲の根をおくる、17（18）葉玉である。四季題の2も、行事を意識した歌といえよう。

8の歌は1の歌の心を別の角度から詠んでいる。1では、同じ汀にあるのに真菰草ではなく、あやめ草を人は選んで引いていくと詠むが、8では、真菰草で包む「粽」のために、顧みられない真菰草が、五月五日にはあやめと一緒「引かされて」抜かされてしまったとしている。「五月五日」にはあくまでも「あやめ草」が主役で、真菰草は従である。その従の「みぎはがくれの真菰草」が、「粽」という五月五日に必要な食べ物のお蔭で、日が当たらないものが表舞台に出る妙を取り上げた歌である。

「粽」は卑俗な（食べ物）であるからか、余り和歌には取り上げられない。しかしながら和泉式部の歌の中には、「粽」が詞書に登場する歌は8の他に三首あり、式部の日常への細やかな配慮を推察させる。このうち、次の歌も、「あやめ草」は詠まれていないが、「粽奉る」、「玉」（「葉玉」であろう）、「菰」などから、おそらく五日詠であると推測される。

石蔵の宮の御許に、粽奉るとて

深沢の菰をぞ刈れる君がため玉は衣の袖にかくらん（『和泉式部集』五〇六）

「葉玉」を歌う17歌では、目上の人から葉玉を賜ったが、それをつける袂が狭い、身に余ると詠む。18歌は「葉玉」あるいは「菰蒲の根」を逆に贈った五日詠であるが、17歌と同様に、自己を卑下した詠み方で、行事の折に詠う歌でありながら、根底に横たわる屈折した思いを窺わせる詠みぶりになっている。

「根合」行事を直接取り上げた歌はなく、五月五日に菰蒲の根を贈るのに付けて詠んだ歌も、清少納言とのやり取りの9、10、11の他には、15、18ぐらいである。なお清少納言とのやりとりは4、5、6にもあり、まとめて第五節で考察する。

さて、15の歌の送り先の「田舎なる人」は、どういう相手かはわからないが、ほととぎすに「いと長き」菰蒲の根をくわえさせる細工物と共に贈ることで、「根」に時鳥の鳴く音、自分の泣く音を掛け、相手の居る「其処」ならぬ、

根が伸びた「底」までの距離の遠いこと、ひいては自らの泣き声の程度をよそえている。そこまでは聞こえはしましまい、私の袂に涙のかかる泣く音はこの長い根を見て察してください、というのである。この作り物の趣向は、前掲の『能宣集』(三六九)の根合の歌の詞書に「州浜に鶴を立てて、菖蒲ママをくはせて、書くれうに」からも推測されるように、やはり五月五日の何らかの行事に関わるのである。歌の内容は音信のない相手への責めであるが、根をくわえたほどとぎすを、ほどとぎすの鳴き声をよく聞き菖蒲も身近な「田舎なる人」にわざわざ贈るといふ、ユーモラスな機知の感じられる歌となっている。

四季題の2は、「駒の足」(こまくらべ)より、菖蒲の草の根の方(根を競う)こそが「節」のものであると歌う。「駒の足」の「音」より「あやめ草」の「根」の方がすばらしいということであろうか。競べ馬と根合は、ともに五月五日を代表する行事として並称されたようで、和泉式部と同時代の歌人の藤原輔尹の次の歌もある。

『新撰朗詠集』上 夏(新編国歌大観)

端午

輔尹

くらぶべき駒もあやめの草も皆同じ淀野に引けるなりけり(一四八)

節供にまつわる具体的な行為が詠まれている歌は以上である。この他の「あやめ草」歌では、節供の行事そのものを歌うというより、五月五日には「引く」——もてはやされるが、五日を過ぎれば顧みられぬ「あやめ草」に、自身を投影するものとなっている。「あやめ草」の歌には「今日」という言葉を読み込む歌が、「今日はなほ」(2、25、27)、「けふのあやめ」(7、21)、「今日だにも」(28)、「今日とても」(29)などあり、五月五日という折意識の強さを窺わせるが、この時重要なのは行事としての「折」ではなく、もてはやし、あるいはもてはやされぬ者を、くつきりと分かち「折」としての五日なのである。

和泉式部はこうした五日に、だれの訪れもなく、便りもない悲哀を詠む。12歌の「引く人もなくてきのふは過ぐし
てき」、13歌「うきに生ひて人も手ふれぬ菖蒲草」、20歌「引けばこそ軒のつまなるあやめ草」、29歌「今日とても引
きにやは来る」などがそうであるが、23歌「隠れ沼に生ふるあやめの残らぬに人の古根」を悲しかりける」もこの類
である。この歌は、隠れ沼に生えているあやめ草は引き抜かれつくして古根も残っていないのに、顧みられない「人
の古根」（飽きられてしまった自分）が悲しいという歌であるが、この歌意を凝集したような「人の古根」という表
現が注目される。「古根」という語は、和泉式部の歌では、初期百首の「花のふるね」（『和泉式部集』九。他出の『後
拾遺和歌集』四八では「萩のふるね」、竹のふるね」（『和泉式部集』一四三八）があり、「竹のふるね」は、『後撰
和歌集』九五四番、『拾遺和歌集』一一九四番にも見られる表現である。このうち後撰集の「笛竹の本の古ねは変る
ともをのが世にはならずもあらなん」では、「古根」は「笛竹の）古音」との掛詞をなし、人事に繋がる表現、す
なわち「古くからの泣き声」の含意を読むむきもある（全釈）。人事に寄せて「古根」を歌うのはこの後撰集の歌く
らいのだが、和泉式部は「人の古根」という表現を編み出し、忘れられた存在を歌う。式部の言語感覚の斬新さ、
また、忘れられた孤愁をみつめる感性がよく窺える表現である。

24は「あやめ草」の歌の中で唯一の題詠であるが、夏の景物を題とするもので、新奇な題ではない。歌の内容は、
人知れぬ沼であやめ草が、誰からも気にもとめられず、もてはやされもせず、一心に生い茂っているというもので、
「あやめ草」を擬人化し、「すさめねど」「こころのかぎり」と詠むことで、孤独を叙情的に象る表現となっている。
なお「心のかぎり」も和歌にはさほど使われない表現で、時代もあまりさかのぼることはできない。

五月五日の歌はほかにも、7、19、22、27歌があるが、いずれも孤独をかこつ女の心情を詠った晴れ晴れとしない
ものである。7歌「涙のみふるや」の軒の忍ぶ草けふのあやめも知られやはする」を例にみると、「涙のみふる」「忍

ぶ草」など、恋歌の表現を使用しつつ、恋情そのものというより、人を恋い求めるのに顧みられない孤独を歌っている。

和泉式部にとって、五月五日の「あやめ草」は、むしろもつとも賞美されるはずなのに「引かれぬあやめ」、ひとり居の孤独、顧みられない自分、寂寥感を見つめさせる歌材となっている。その根柢にあるのは「恋」、とりわけ独り恋うる悲しみである。節句行事のため、あやめ草の根を引き贈り合う五月五日は、引かれぬ根、贈られぬ身の「孤悲」を知らされ、確かめる「折」でもある。「折を過ぐさぬ」和泉式部がとりわけこだわった五月五日という「折」から、和泉式部の感性のありかをよく窺うことができる。

四 和泉式部統集「あやめ草」歌群（25、26）（28、29）

この和泉式部の「あやめ草」歌の中には、いくつかの歌群が見られる。清少納言との贈答歌4〜6、および9〜11の二種類（第五節で考察）、17〜22、25、26と、28、29である。このうち25、26、28、29を考察する。

25、26歌は、五月五日、翌六日と続く連作である。すなわち25歌では、雨が強く降る五月五日、男の訪れがないのかの「独り言」で、今日は一層あやめ草の根のはった所も雨で水が増えるように、自分の寝所は涙のみに増して流れるという、いかにも鬱々とした心情を歌う独詠歌である。この25歌は独立した歌であるが、前の歌は詞書からみてこれに関連した内容であるらしく、物語的展開をよむことができる。

25歌（『和泉式部統集』二二四七）の前の二二四六歌と詞書は次のような内容である。

男の、御嶽精進とて、ほかに□□□みあれの日、葵に挿して

かざせどもかひなき物はおのが引く標の外なるあふひなりけり（統集・二二四六）

この詞書の「男」が、26歌（『和泉式部統集』二二四八）の「この精進する男のもとより」と同一人物と考えると、

男（夫か）は「みあれ」の精進を理由にずっと訪れていないらしい。そして男は忘れていたか、五月五日にも便りもよこさず、和泉式部が「独り言」を歌った翌六日になって、言い訳を寄越すのである。来られない場合は便りだけでもよこすのが「折」をわきまえた行為なのに、という悲しみが26歌の趣旨である。ここの「あやめ」は「条理」であるが、淀野（夜殿との掛詞）に気づかれず生えているあやめ（和泉式部自身をよそえる）のことでもある。このあとに次の三首が続く。

詣づる程になりて、道のほど着るべき狩衣なむ様なる物縫はせる

うち交はし寄る着るまじきあさ衣は縫ふも物憂きものにぞありける（一二四九）

とてやりたれば、狩衣を、「着よく、肩などもよし」といふ事をいひたれば

かり衣我によそふる物ならば袂よくしもあらじと思ふ（一二五〇）

縹の帯の所々かへりたるを着替へて、男のおこせたれば

馴れぬれば縹の帯のかへるをもかへすかどのみ思ほゆるかな（一二五一）

精進が終わった男（夫）から、金峰山にいよいよ詣でるにあたって狩衣の注文があり、「袂を交わして着るわけではないのに」と歌をつけて送る。男からは催馬楽を引用して調子のよい返事をしてくる。最後は縹の帯をかへす一別れるのかとのみ思われるという歌で一段となっている。この中で男（夫）は詞書にのみ表れ、歌のやりとりは記述されていない。それを省いて式部の歌のみで、一連の歌物語を構成しており、この25、26歌は歌物語の中心になり、あまり顧みられない妻が主婦としての役割果たしつつも、孤独な心情を詠っているのである。

また、28歌の詞書は「堅根（腫れ物の『ねぶと』のこと）病む」と「人の許に云ひたる」とあり、和泉式部の知人（女）のところに「堅根病む」言ってきた人（男）に、五月五日という折を捉え、和泉式部が贈った歌である。「菖蒲

の堅い根ですら引き抜かれてしまう今日ですから、せめて今日だけ根太は引き抜いて捨て（訪れ）たらどうなの」と、お節介にも他人の恋人に贈っている。歌語ではない病名の「堅根」から「堅い根」の掛詞を見出し、挿擧しているのである。そして「同じ日」に、今度は自分の恋人に29歌、「ひかれぬあやめ草」の悲哀を詠って贈っている。この二首は出だしが「今日だにも」「今日とても」、二句目は「引きやは捨てむ」「引きにやは来る」、三句目は「隠れ沼に生ふるかたね」「菖蒲草ひとしれぬ」と、対比して詠んだような、相似たリズムをもつ。同じ五月五日に続けて二首詠み、一首は知人の恋人の男、もう一首は自分の恋人と、二人の男に贈った歌というわけである。機を接しての作歌という点では一首の連作であろうが、二人の別の男に贈った贈歌になっているために、何とも面白い、いろいろな物語を想像させる特異な連作になっている。例えば知人の女性でなくその男の方に歌を贈るとは、男と和泉式部の関係はいかなるものだったのか、それと対比していまの恋人に歌を贈る心境は如何、という風に。

この二種の歌群のうち、25、26歌は、前後の歌を合わせて六首の歌で一つのストーリーが完結する。これは五月五日を中心にした歌物語であり、シチュエーションは違うが、『和泉式部日記』の数首の歌の贈答でひとつのまとまった場面を作り、それから連続した次の場面に展開していく手法を想起させる。また28、29歌は、同日に二人の男に歌を贈るといふ詞書をわざわざ付すことで、あるいは両方ともに恋人だったのかと思わせるストーリー性を喚起している。これらは、詞書を含む巧みな構成意識によって物語性を付与しているわけで、優れた歌人であるばかりでなく、和歌をもととしながら物語的構成をなし得る和泉式部という作家の独自性を窺うことができる。またこうした和泉式部の作家性が、五月五日という「折」にこだわる感性から導かれることも見て取れよう。

五 清少納言との「あやめ草」贈答歌

和泉式部の家集には、贈答歌のどちらかでの、和泉式部自身が詠んだ歌は多く載せられているが、相手の歌はあまり収載されていない。詞書には記述されるが、「人」からの贈歌、返歌そのものは採られていないものが多い。相手の歌がわかるのは、帥の宮、公任、赤染衛門、相模、道綱、伊勢大輔、道長、道濟などがある。その中で清少納言とのやりとりは、同じ「あやめ草」を媒介に、清少納言の返歌も含めて二カ所（A群、B群とする）に出てきている。ここでは二人の間で「あやめ草」が素材としてどう詠まれているか考察する。

A群

4 流れつつみつのわたりのあやめ草ひきかへすべき根やは残れる（五〇三）

同じ日、清少納言

5 駒すらにすさめぬ程に老いぬれば何のあやめも知られやはする（五〇四）

かへし

6 すさめぬにねたさもねたしあやめ草ひきかへしても駒返りなん（五〇五）

B群

五月五日、菖蒲の根を、清少納言にやるとて

9 これぞこの人に引きけるあやめ草むべこそ聞のつまとなりけれ（五三八）

かへし

（清少納言）

10 聞ごとのつまに引かるる程よりはほそくみじかきあやめ草かな（五三九）

また、かへし

11 さはしもぞ君は見るらんあやめ草ね見けん人にひきくらべつつ (五四〇)

A群の4の歌に詞書がないので、4は清少納言との贈答に含めず(この場合他の人に贈った単独の歌とする)、5、6を一对の贈答と見る全釈や伊藤博氏の解釈がある。この場合、流布本系の群書類従本の本文(日本古典全書など)「清少納言」のように、5を和泉式部の歌、6を清少納言の返歌として解釈している。これに対して、4は「詞書欠落」とみて5の「同じ日、清少納言」に続くものとし、三首贈答歌として解釈する立場で、萩合氏(注12)、寺田透氏(注13)、保木寿子氏(注14)である。この場合、5は清少納言、6は和泉式部の歌となる。

4は、和泉式部の他の「あやめ草」の歌の定番である掛詞縁語、「あやめ草」「引く」「根」「寝」「音」が用いられ、6の「根」「寝」「あやめ草」「引く」と対応していることと、5の詞書の「同じ日」とあるので、これは前歌を何らかのかたちで受けていると考えればやはり4、5、6は三首ひとまとまりと考えられよう。この形はB群とも対応する。この4の歌の「みづ」は、摂津の国御津とする説(全釈、文庫)がある。「御津」は「官船の発着する港を尊んでいう。」(角川古語大辞典)で、何カ所もあり、難波の御津もそのひとつである。しかし、この歌の「みづ」は「美豆」であろう。「美豆」は、山城国の歌枕であり、摂津ではない。「角川古語大辞典」の「美豆」の項目には、「山城国久世群奈良郷の木津川と宇治川の合流する付近の地(京都市伏見区淀美豆町、久世群久御山町)。ここは古く美豆御牧(みづのみまき)が置かれ、馬寮の馬を肥えさせるために移して放し飼いにし、諸社の祭りの料の馬が飼われていた(左右馬寮式)。……淀川を挟んだ対岸の西淀との間には淀渡(よどのわたり)があり、京から奈良への淀路(よどち)はこの美豆みつの渡(雍州府志・一)を渡って生駒山脈の東麓を南下した」とある。

美豆は、「みづのみまき」と「駒」、「あやめ草」「真菰草」と組み合わせる歌に詠われた。『惠慶法師集』二二二番歌(新編国歌大観)には、次のような歌がある。

よどのなるみづのみまきにはなちかふこまいはへたり春めきぬらし

また『枕草子』第一〇段「卯月のつごもり方」に「卯月のつごもり方に、初瀬に詣でて、淀の渡りといふものをせしかば、舟に車をかきすゑて行くに、菖蒲、菰などの末短く見えしを、取らせたり」という一文がある。清少納言も初瀬詣での行き帰りに通ったところなのであろう。つまり、清少納言の熟知の地であることを前提にした詠みかけであると考えられる。また「流れつつ」と「みつのわたり」は平安時代ではこの歌しか見られない歌枕である（中世になると後鳥羽院、家隆が詠んでいる）。「引き返す」はもとの所の戻る、以前の状態に戻る、昔に返るの意がある。

歌意は、川の水（大雨で水が増したか）に押し流されて、美豆の渡りのあやめ草は、引いてかえるべき根は残っているであろうかということ、掛詞の意を含めば、泣いてばかりいるあやめ草は、もとに戻れるよりどころが残っているでしょうかという、からかいの歌である。

5は清少納言の歌で、第三句が岩波文庫本では「老い」とされているが、榎原本影印は「おひ」であり、「新編国歌大観」、「私家集大成」も「おひ」とする。清水文雄氏『校訂本和泉式部集』^{（注15）}では「おいぬれば」とあり、校異としても取り上げられていない。「おひ」であれば、「生ひぬれば」で、本歌としては、従来指摘される

大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし（『古今和歌集』・雑上・八九二・よみ人知らず）
より「生ふ」「駒」「すさめぬ」「菖蒲草」を含む、次の躬恒の歌のことばに近い。

生ふれども駒もすさめぬ菖蒲草かりにも人の来ぬがわびしさ（『拾遺和歌集』・恋二・七九六・凡河内躬恒）

躬恒の歌を引くと考えれば、清少納言歌の歌は、駒にさえ嫌われる程あやめ草が茂っているので、どのあやめかどうかの区別はできませんよという歌意になる。

しかし、躬恒自身の歌が、古今集の歌を引いての詠歌である可能性もある。とすると、すでに躬恒の歌自体「老い

ぬれば駒もすさめぬ」の意を含んでいると考えることができる。6の和泉式部の返歌とのつながりを考えれば、馬でさえ、相手にしてくれないほど年取ってしまったので、という含意があるとみる方がわかりやすい。

6は和泉式部の返歌である。「ねたさもねたし」はまた、歌の用例の少ない表現であるが、『和泉式部正集』七三三に確認できる。また『後拾遺和歌集』の堀川右大臣頼宗の歌（雑二・九一一）にも確認できるが、この頼宗の歌の返歌は和泉式部である。

「こまかへる」は「若返る」の意であるが、平安時代の和歌ではやはり用例は少ない。

あさつゆのけやすきわか身おいぬとも又こまかへりきみをしまたむ（人丸集・一六七）

（冷泉家時雨亭叢書の人丸集による。人丸集書陵部本は「若かへり」である。和歌文学大系^{〔注七〕}17）

この6では「すさめぬに」駒から好まれないとは、残念なこと、くやしいこと、もう一度ひきかへしても、ぜひ駒返りしましょうとするが、前歌の清少納言の歌に「老い」の含意がないとなると、「若返る」と解釈しづらいところである。

この三首の背景に清少納言の生活環境の変化を関わらせて考える説があるが、ここでは、『和泉式部集』「あやめ草」の歌群として考えたい。清少納言の恋愛生活の何事かを知った和泉式部が4の歌を詠みかけ、清少納言が「駒すらにすさめぬ」あやめ草を我が身にたとえて自嘲する5を返し、それに対し6和泉式部が「ねたさもねたし」癪に障ると憤慨し、暗にそんなことはないと励ましている。なお「駒返る」は「老い」に対する詞であれば「若返る」だが、4の「ひきかへすべき根やは残れる」と対応し、「駒」を男と考えて、素直に男があなたのもとに帰ると歌っているのだとも解釈できようか。

B群の三首は、A群よりわかりやすい。

9 これこそ昔から人が引いてきたあやめ草、なるほど寝屋の端（妻）となるのにふさわしいものですね。

10 寢屋ごとの端に葺くために引かれるものにくらべると、細くて短いあやめ草ですね。

11 そういう風にあなたは見るでしょうね。いろいろな根(寢)をみた人とひきくらべて。

9の「これぞこの」は業平が第三句に用いて著名であるが(古今・雑上・八七九)、初句に用いるのは、中世以降の歌人には見られるが、中古では和泉式部以外にない。「むべこそねやのつまとなりけれ」は、『大式高遠集』^(長18)に次の例がある。

夏くれば淀野にねざす菖蒲草むべこそ人のつまと見えけれ(大式高遠集・三四二)

9はあやめ草の根を清少納言にたとえて、いかにも寢屋の妻にふさわしいとたたえたのに対して、10は、贈られたあやめ草は寢屋の端(夫)を葺くには貧弱なあやめ草だと返し、11は、そのあやめ草を、今まで連れ添ったいろいろな人と引き比べて、あなたはそう思うのでしょうかと返している。表面上、和泉式部が贈った菖蒲の根をあれこれと言っているのだが、一方、それぞれお互いの恋愛生活を俎上にのせて、からかい合っているように思われる。軽妙なやりとりである。

A群B群ともに、五月五日の折を捉え、お互い意を通じ合ったもののみが理解できるニュアンスをこめて「あやめ草」を俎上に歌う歌となっている。もとより「あやめ草」は根、寝に続くものであるから、必然的にお互いの恋愛生活を意に含み、やりあう歌となっている。ここでの「あやめ草」は、和泉式部固有の心情を託すというより、当意即妙に歌を返すための、いい素材となっている。このやりとりは和泉式部の他の「あやめ草」歌とは違い、ときに自嘲的な相手にやさしく応える歌も含みつつ、全体として明るい。それは相手が機智とユーモアに富んだ『枕草子』の作者、清少納言であるからだろう。たとえば『和泉式部集』の中で和泉式部を論すような歌を贈ってきている赤染衛門相手では、望み得ぬ軽妙さである。「菖蒲の根」を贈る親しい同性の間柄ならではの、機知に富んだやりとりをた

どり得るように、和泉式部集には珍しく、清少納言側の返歌も漏らさず残した両歌群は、和泉式部と清少納言のプライベートを覗き見するような、ある種の物語的興味を喚起する歌群となっている。

六 まとめ

五月五日の節供の「あやめ草」という歌材を詠んだ和泉式部の歌の分析を通して見えたことは、ひとつには和泉式部の言語感覚の鋭さであろう。和泉式部は、そこに普通和歌では用いられない言葉をさりげなく組み合わせるといった技巧もさることながら、定番の掛詞を使用しても、思わぬ視点が含まれていたり、一見何気ないように見える歌でも、必ずその歌の主意を表現する工夫が見られ、またそれがさりげなく行われているので、気がつかれない。また、連作のところで述べたように、歌の配列やそれを最大限活かす詞書に見られる創意は、やはり『和泉式部日記』の作者であることを思わせられる。

和泉式部が「折」を大事にすることは『和泉式部日記』でも繰り返し述べられていることである。では「五月五日」の「折」の何が大事なことなのか、節会にまつわる行事や長寿を願うことが、和泉式部にとっての「折」ではない。もてはやされる存在と忘れられた存在の対比が「あやめ草」を契機にくっきりと分かれた。五月五日に「あやめ草を引く」という行為が、反対に「ひかれぬあやめ草」という存在を生む。自らをそうした思考に誘う「あやめ草」に仮託して表現できる。それが、和泉式部の「折」なのである。

和泉式部がすぐれた歌人であることはその当時から認められていたのであるが、このような、言わばありふれた歌材を詠んだ歌を通して、その表現の独自性や個性の一端がわかるということは、まだより多くの歌がその本質を見極められないまま存在しているとも考えられる。今後の課題としていきたい。

- 注1 「和泉式部集 和泉式部統集」清水文雄校注 岩波文庫 岩波書店 一九八三)
- 注2 「貫之集・躬恒集・友則集・忠岑集」和歌文学大系19 田中喜美春 平沢竜介 菊池靖彦著 明治書院 平成九年)
- 注3 「能宣集注釈」(増田繁夫校注・訳 貴重本刊行会平成七年)
- 注4 「赤染衛門集全釈」(関根慶子ほか著 風間書房 昭和六一年)
- 注5 「和歌植物表現辞典」(平田喜信・身崎壽著 東京堂出版 平成一〇年)
- 注6 注3に同じ)
- 注7 21歌は岩波文庫本の注に「『同じ』の次に『日』などの語欠落か」とあり、仮に「日」を入れてみると20歌と「同じ日五日」となり五日詠となる。「和泉式部集全釈」は「同じ。五日」と区切って、五日詠と解釈している。
- 注8 「和泉式部集全釈」佐伯梅友、村上治、小松登美著 改訂版 笠間書院 平成二十四年
- 注9 注8に同じ)
- 注10 「和泉式部 和歌と生活」伊藤博著 笠間書院 平成二二年
- 注11 「和泉式部集 小野小町集」窪田空穂校注(日本古典全書) 朝日新聞社 昭和四二年
- 注12 「清少納言全歌集 解釈と評論」萩谷朴著 笠間書院 昭和六一年
- 注13 「和泉式部」寺田透著(日本詩人選 8 筑摩書房 昭和四六年)
- 注14 「実存を見つめる和泉式部」久保木寿子著(日本の作家13 新典社 平成十二年)
- 注15 「日本古典文学影印叢刊9 榎原本私家集(一)」日本古典文学会編貴重本刊行会 昭和五三年
- 注16 「校訂本和泉式部集(正・統)」清水文雄著 笠間書院 平成六年 新装版)
- 注17 「人麻呂集」阿蘇瑞枝校注 和歌文学大系17 明治書院 平成十六年
- 注18 「大式高遠集注釈」中川博夫 日本古典文学会編 貴重本刊行会 平成二年
- 引用 「万葉集」、「古今和歌集」は、「拾遺和歌集」、「新日本古典文学大系」の本文による。
「枕草子」 新編日本古典文学全集18 松尾聰、永井和子校注・訳(小学館 平成九年)

(東京女子大学大学院博士後期課程人間科学研究科在籍)

キーワード

和泉式部、和泉式部集、清少納言、菖蒲、あやめ草、五月五日